

人権いるま

— 第4号 —
令和8年3月発行

編集・発行 入間市人権教育推進協議会・入間市教育委員会
事務局 社会教育課 入間市豊岡1-16-1 TEL04-2964-1111

主な内容

- ・ 令和7年度人権標語紹介
- ・ 令和7年度人権作文紹介
- ・ 人権教育事業参加レポート

- ・ トピック
メディアリテラシーの記事紹介
- ・ 令和7年度購入人権啓発DVD紹介
『みんな笑顔になる日まで』
『いつの間にか拡散 ネットに潜む部落差別』



令和7年度人権標語紹介

- | | |
|---------------------|----------------------|
| ◆名前には 大事な意味が こめてある | ◆どうしたの といえる君は ヒーローだ |
| ◆多様性 人の個性を 認めよう | ◆ありがとう 世界が変わる その一言 |
| ◆らんどせる わたしは青に 決めたんだ | ◆言葉の銃 画面越しでも あたってる |
| ◆私もあなたも 誰かにとっての 宝物 | ◆その一言 送信したら はいOUT |
| ◆あいさつは 心をつなぐ あいことば | ◆個性とは だれもが持てる 宝物 |
| ◆「ありがとう」 その一言を 大切に | ◆みんなちがう それは大事な たからもの |
| | ◆助け合う すてきな笑顔 守るため |



令和7年度人権作文紹介

いろいろなやさしさ

小2

わたしは、このまえおかあさんとおでかけのかえりに、ぱんぱんに人がのっているでん車にのりました。そのとき、すごくつかれているじぶんを見ていた、まえにすわっている人が、

「すわってどうぞ。」

と言って立ってくれました。そのとき、わたしは、はずかしくてなにも言えませんでした。そのあと、まえにすわっていた人の気持ちをよくかんがえてみたら、せっかくゆずってもらったのにむごんだったからやさしくしてくれた気持ちがかんがえられなかったかと思って、家にかえってからすこしかんがえてみました。そのとき、一つ気づいたことがありました。そういうことをしたのがじぶんだったらどんな気持ちなのかということです。けれど、わたしのやさしさと人のやさしさはちがうから、思っていることもちがうとかんがえたら人の気持ちをよむことが、人生でとても大切なんだなとわかりました。

いろいろなやさしさをそうぞうし、そのやさしさの気持ちをよむことをこれからもっとも大せつに、それからいつもわたしのむねでいつまでもかかえます。また、いまのようなことがあつたらかならず、

「ありがとうございます。」と、言えるようにがんばりたいです。それがかんがえないようになったらこんどは、わたしがせきをゆずれるようにしたいなと思います。

「エマってなにじん？」

そう聞かれたことが何回かあります。私は父がスウェーデン人、母が日本人のハーフです。私のように両親の国籍が異なる子どもは、日本ではハーフと呼ばれたりしますが、場合によってはミックス、ダブルと呼ばれることもあります。それは、ハーフ＝半分で未熟だったり、足りない印象があったりするからだそうです。私の学校にもいろんな国のミックスや外国人の生徒が何人もいて、みんな同じように学び、活動しています。私はハーフと呼ばれることに抵抗がなく、嫌な思いもしたことはありません。そんな私は、日本とスウェーデンの国籍を持っていて、二十歳までにどちらか一方の国籍を選ぶことになります。どちらの国籍を選んで生きていくとしても、自分の将来に暗いイメージはありません。でもそれは、人によるのかもしれないと思うことがありました。

そんなふうに自分についてぼんやり考えていた頃、日本に住む外国人についての記事をネットで読みました。残念ながら、事件や事故のニュースでした。日本に住む特定の国籍や人種の人が悪く言われだしていると感じていましたが、こんな風に事件や事故が続くと、同じ日本人同士の事件や事故があったとしても「その国やその国籍の人が悪い」というような印象が残りやすいなとも思いました。そして良いニュースよりも悪いニュースのほうが広まりやすいとも思います。

日本には、外国人が多く住む地域があちこちにあります。今までその地域に住む日本人と良い関係を築いてきたはずなのに、いくつかの事故やトラブルのせいで、多くの良い外国人よりも、そうではない人の印象が強くなっています。そこに住む人たちに対する気持ちが冷たくなり、その人たちが今まで出来ていた事や付き合いしてきた人たちから日本人が離れていっているとも聞きます。その人たちの店を利用したり、私たちが避ける仕事をしてきていたのに、私たちが都合よく視野を狭くして、誰かの権利をうばっている可能性があります。その国の人の子だからという理由でいじめられているとも聞きました。

世界のいくつかの国や地域では、長く戦争が続いていますが、ある国の父親を持つ友達がとても気まずそうにしていたことがあります。戦争はゲームではありません。どちらかを応援するものではなく、争いが解決することを願うものですが、その頃はメディアやイメージ、国の規模の問題で友達の親の国が悪く言われる事が多く、遠く離れた日本に住み、全く関係のない友達まで間接的に国同士の争いに巻きこまれた形になりました。もし、その友達の近くに、争いの敵になっている国の人がいたら、その友達ももっと苦しい状況になっていたかもしれません。国同士の争いも、場所が変わると個人を傷つけることになるとその時、感じました。それが個人対大勢だったら、その人の人生を変えてしまうかもしれません。大きな意見やイメージに流されて、普通に暮らす人の権利をうばう例のひとつだと思います。

新しい病気が世界に広まった時も、特定の国が叩かれたり、悪く言われた時期もありました。それはその国籍を持つ人たちのせいではなく、私たちと同じように体調を崩したり、亡くなった人も多くいました。その国の全てが悪いように言われて、居心地の悪い時間を何年も過ごした人が日本にも多くいたはずで、その国の出身の人たちが今まで通り、日本でうまく暮らしていく権利がうばわれた時期だと思います。

日本は島国なので、陸が繋がっている他の国がありません。日本にいるのは日本人とそれ以外という考え方がどうしても強い気がします。その分、受け入れる心や視野を広く持つことのハードルが少し高い気もします。「色々な人たちがいる」国になってきているのに、気持ちがついていけないようにも思えます。そのひと個人を尊重するべき時でも、たくさんの意見に流されて、だれかの権利や安定を無意識でうばっていることに気づかない人がどうしてもいます。先に書いたように、私が持つ二つの国籍について、不満や辛い経験はありませんが、それはたまたま今まで何もなかったからだと気づきました。もし、日本人に偏見のある国に私が住んでいたなら、気持ちに反して私は日本国籍を選ばないかもしれません。同じように日本に住む日本人以外の人たちが、自分の国籍をごまかしたり、隠したくなるような事があってはならないと思います。何も悪いことをしていない人たちが、国籍や出身を知られる事で避けられたり、断られたり、軽く見られるような権利のうばわれ方をしないのが、日本という国であるべきです。外見や文化の違い、考え方や価値観を理解し近づけ合って、差別や偏見という国境がない日本になっていけばいいと思います。

姉のことを「他とは違う」と思い始めたのは、きっと物心ついてすぐのことだっただろう。でも、姉が「ダウン症」ということを知ったのは、この作文を書く前日のことだった。

私が小さいときから、姉は「家族だけ違う」と心のどこかで思っていたのは確かな事だった。それほど、私とは全く別のくらしをしているように見えたからだ。幼稚園の記憶は定かでないが、「違う」と意識し始めたのは、私が小学校に入ってからのことだ。私の小学校では、クラスが一組、二組と分かれているのに対し、姉は特別学級というクラスにいた。当時の私は、そのことだけで「他とは違う」と錯覚してしまった。今思うと、とんでもなく失礼で、無礼なことをしてしまったなと痛いほど実感する。また、学校での生活も、これまた大きく違っていた。授業内容はもちろん（もちろんと言ってしまったらこれもまた失礼だと思うが）何をするにおいても先生がつきつきり。そして、家での生活も、私が自分一人ですることができることを姉は親がいないとできない。姉が何をするにしても、いつも近くには親がいた。だからなのか。いや、だからだ。いつしか、そんな姉に対して怒りが沸き、親に対して寂しさが沸き、それらのあらゆる感情がだんだんと嫉妬に変わっていったのは。私は姉と少しずつ距離を取っていった。もう「家族」とはあまり思えなくなってしまったから。

ある日、私が小三、四年生ぐらいのことだったと思う。「姉」「親」への嫉妬が日に日に増していったある頃。ついに母にこう言ってしまった。

「なんでこんなお姉ちゃんを生んだの。」

母は、血相を変えて私に怒った。

「なんでそんなことを言うの」

それだけだった。だけど、その一言に、とても動揺した。確かに、姉のことを否定するような言い方をしてしまった。でも、本当のことではないか。私はそう思っていたから、それ以降そのことを話に出すことはなかった。

そんな私の考えを一変させる出来事があった。「ダウン症」の存在を知ったことだった。いつのことか、なぜ知ったのか、詳しいことは覚えていないけれど、ダウン症の特徴が姉の特徴とほぼ一緒だったのだ。

「まさか、まさか、ね…」不意にそうつぶやいた。信じなかった。いや信じたくなかったのか、その時はまだわからなかった。

中学二年生の休み時間の教室。こんなことがあった。人というのは、本当に無意識なのだろう。ふざけ合っていた男子の中で、とある一人が、ばかにした態度で、「ショウガイシャじゃん。」と、一言。ふざけていた人も、周りの人も笑い、その他の人は何も気にしていない様子。ただ一人、私はあの一言を言い放った人、笑っていた人に対して、とてつもない怒りと、そして悔しさが込み上げてくるのを感じた。それと同時に、「お姉ちゃんは障害者」ということをさらに実感した。だからこそ、姉をばかにされたような発言に腹が立ち、なぜばかにされなければならないのかと、悔しさがあった。

「私たちと同じ人間じゃないか。」とつぶやいたのは、そんな思いからだった。

その日を境に、私は「障害の生きる権利」について考え始めた。同じ生きている人間なのに、どうしてばかにされ、笑われないといけないのか、特徴的な顔だからか。知的能力が低いからか。考えたくないが、他にもきっと理由があるのだろう。だけど、いかなる理由があろうと、私たちが生きる世界から引き離す理由には絶対にならない。それだけは断言できる。

この世界のあらゆる場面で、障害者に対して大きな壁を作っている人がきつという。ならば、少しずつでも互いを理解し、壁を低く薄くしていくことはできないだろうか。そして、この先、せめて透き通った壁へと変わり、互いを認識できる距離感になってほしい。別に、一気に壁を無くして手を取り合え、とは言わない。人と人が関わっていくことは、そう簡単ではないことは、家族である私が一番実感している。でも、だからこそ、少しずつでも壁を乗り越え、障害者とも手を取り合い、笑い合い、傷を癒し合えるような、そんな関係を築きたい。誰しもが「より良く生きる権利」を自信を持って主張できる世界になってほしいと切に願っている。

そのために、私は何ができるのか。まずは家族である姉にそっと寄り添っていこう。

前夜、姉の病気を素直に受け入れられたのは、私自身のそんな覚悟があったからだ。

人権教育事業参加レポート

令和7年度 入間市人権啓発講座

『災害時における人権への配慮』

講座を通じ、災害時に起こる人権侵害の実例に衝撃を受けました。非日常で心身が傷ついた状況では、誰もが加害者にも被害者にもなりえることを痛感。だからこそ、物資の備え（ローリングストック）や心のケア（ストレス・他者との関係）を日頃から意識することが重要だと感じました。「個人の力は微力だが無力ではない」という言葉が深く心に残りました。

執筆 人権教育推進協議会委員

木村 仁美

令和7年度 入間市人権啓発講座

『インターネットと人権侵害』

インターネット上の人権侵害に対する法的取締りは、被害者にとって十分とは言えないが、法改正は進んでいる。

人権を守るには、他者への配慮と、自らが加害者・被害者にならないための努力が欠かせない。情報をネットから得る現代では、利用者のモラルが強く問われている。情報プラットフォーム対処法が国内法であることを初めて知り、海外経由の誤情報の拡散に恐怖を感じた。SNS では投稿削除が難しく、被害を生まないよう慎重な発信が求められる。

基本的人権を見直し、対面で話す場面を思い描きながら互いを尊重する姿勢が重要であり、それこそが社会の一員としての責務だと感じた。

執筆 人権教育推進協議会委員 米川 好子

トピック【メディアリテラシーの記事紹介】

メディアリテラシーとは、テレビやインターネットなどメディアから発信される情報を鵜呑みにせず、読み解き、分析・評価する能力のことで、情報発信能力も含まれます。



「偽情報に振り回されない」 読売新聞編集委員 吉田尚大

SNSや動画によって、小学生にも偽情報が簡単に届く時代だ。小学生の子ども本人ができる対策はあるのだろうか。民間団体「日本ファクトチェックセンター」編集長の古田大輔さんは、気になる情報はすべて①「誰がそう言っているのか」という発信源 ②「なぜそう言えるのか」という根拠 ③信頼性の高い機関の情報との比較、の3点を確かめることを勧めている。

例えば、同級生から出所不明の話があった場合、「それは誰が言っているの？」と聞き返し、その人は正しい情報を知りうる立場なのか、また何を根拠に言っているのかを考え、「偽情報のようだ」と判断した場合は「違うよ」と否定せず、聞き流すのも穏便に済ませる対処方法だという。

【引用 読売新聞朝刊 令和7年9月4日 暮らし家庭面】

令和7年度購入人権啓発DVD 紹介

『みんな笑顔になる日まで』30分 中学生～

この作品は、ヤングケアラーと若年性認知症に焦点を当てた作品です。

ヤングケアラーは、その環境によって日常や将来が制限されることがあります。

そして、若年性認知症になった方は社会とのつながりを失い、自分の居場所を見失ってしまうこともあります。

子ども食堂での出来事をきっかけに、皆の笑顔があふれるまでを描きます。



このDVDをご利用希望の方は、社会教育課へお問い合わせください。過去に購入したDVDリストは、市公式ホームページに掲載しています。

『いつの間にか拡散

ネットに潜む部落差別』21分 中学生～

インターネット上では、部落に対する偏見や差別情報が氾濫しています。

全国の自治体では、SNSのモニタリングで差別投稿の削除要請を行っており、SNS運営事業者が、削除等の対応を行うことを義務付ける法律も施行されています。

自身のダンス動画に書き込まれた部落差別コメントに悩んでいた主人公が、友人等の通報により削除でき、投稿を再開するまでを描きます。



人権いるまのアンケートにご協力ください。